

十六世紀に制作された永青文庫所蔵「秋夜長物語絵巻」（以下、永青文庫本）は、一三七五年までに成立した『秋夜長物語』を題材とする絵巻である。同本に先行し、主題を同じくする作品として、十四世紀末期から十五世紀初頭に制作され、祖本の存在が指摘されているメトロポリタン美術館所蔵本（以下、メット本）がある。従来の永青文庫本研究では、メット本や同時代の絵巻との比較を中心に、その図様や絵画様式が検討されてきた。しかし、両本の詞書を踏まえた図様の分析がなされていないことに加え、既に指摘されている十四世紀絵巻にみえる図様との類似は十分な検証がなされていない。本発表では永青文庫本の図様と絵画様式を今一度分析し、秋夜長物語絵巻の図様の系統を考察する。

はじめに、メット本との詞書の異同を考慮しつつ、永青文庫本とメット本との図様を検討した。両本の大筋はほぼ一致しているものの、永青文庫本の詞書は物語の展開を損なわない程度に文章の省略や表記の改変が認められる。以上の詞書の異同を踏まえて図様を比較すると、両本に見出せる共通点が、詞書では言及されない細部描写や画面構成にあることが指摘できる。両本の詞書に現れないモチーフに共通点が認められることから、制作年代に隔たりがある永青文庫とメット本には、共通の図様典拠をもつ祖本があったことが推測される。

次に絵画様式を検討すると、永青文庫本の画面構成、筆法、画中画は、いずれも同本が十六世紀に制作されたことを示唆するものである。一方で、永青文庫本には一部の図様や図像に高階隆兼が手がけた十四世紀絵巻との類似も認められる。先に永青文庫本とメット本には共通の祖本が存在した可能性を提示したが、メット本には隆兼が関与した絵巻との類似は認められない。ここから、永青文庫本が十四世紀頃に制作された隆兼様式を有する「秋夜長物語絵巻」を原本としている可能性が浮かび上がる。

永青文庫本とメット本の違いが大きいことは、両本の構成や場面選択からも明らかである。永青文庫本は時間経過の表現として四季を当て、瞻西個人を焦点化している。この構成は、雲居寺の興隆に注目するメット本とは異なるものである。

以上により、永青文庫本は十四世紀頃に制作された高階隆兼様式を有する原本を参照し、十六世紀の時代様式を以て制作されたと考えられる。『秋夜長物語』成立後、永青文庫本とメット本の共通する祖本である秋夜長物語絵が制作された。この祖本の図様を参考に、メット本の原本にあたる作品が南北朝末期に、永青文庫本原本が十四世紀頃に制作された。この永青文庫本原本は隆兼様式を有し、瞻西の生涯に注目し構成されたものであった。その後十六世紀に至り、原本を模写ではなくあくまで参照し、同時代の風俗や絵画様式、また四季の要素が反映され、制作されたのが永青文庫本だったのではないかと考えられる。